あおい通信 第94号

第94号 平成25年3月1日
リハビリテーション
デイサービス葵・編集委員会
練馬区東大泉3－17－5
カトウビル3F
電話 03－3978－0919

新東京街歩き
その三 上野恩賜公園

毎年恒例、「上野の山」の花見の賑わい

写真・文 七海邦夫

梅の花が終ると人々は、お花見の季節を心待ちにする。卒業や進学、就職などの時期と重なり、人生の門出を祝うに相応しい華やかな桜の花。一年で最も心の弾む季節である。

東京の人なら、桜、花見と聞いたら、先ず思い浮かべる所が上野の山。お花見の時期には全山が桜色に染まり、その下では熾烈な場所取りが展開され、宴の跡には山のようなゴミが残る。これが現在のお花見の現状である。通称「上野の山」は現在、不忍の池を含め五十三万平米の広大な都市公園「上野恩賜公園」である。しかし、その成り立ちは興味深い。

上野の山は武蔵野台地のはずれに舌状に突出した丘で、徳川家康が江戸に幕府を開く前は、縄文・弥生の古墳等があった場所。

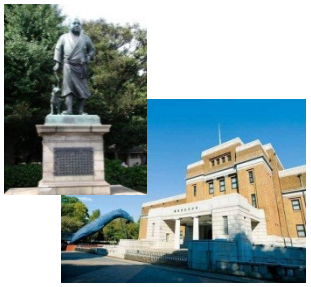
三代将軍家光が江戸城の鬼門を封じるために、天海僧正に命じて寛永寺を建てた。その天海が三十六万坪の境内に桜を植えたが、芝の増上寺と共に徳川家の墓所となり、皇族が住職になったことから、上野の山での花見は鳴り物・飲酒は禁止、同心が見回り、暮六つには門が閉められるので、庶民が花見を楽しめる場所ではなく、専ら文人墨客が活躍したようだ。

徳川家の墓所「寛永寺」

池之端に山下口＝黒門口という木戸の跡がある。黒門とは寛永時の総門のことで、この黒門口では、幕末に彰義隊と官軍の激戦が繰り広げられた。そこを登ると右手に清水観音堂がある。その辺りから、寛永寺の根本中堂の跡に作られた大噴水に至る道の両側は、桜で埋め尽くされ、花見のメッカとなるところである。

時代が明治となって、政府はこの地に学校や病院の建設を考えたが、視察したオランダ人医師、ポートワンが公園にするよう進言したおかげで、明治六年日本の公園第一号が誕生し、おかげで庶民も飲酒OK、鳴り物OKの花見が楽しめるようになった。

現在、旧寛永寺五重塔、上野東照宮、清水観音堂、徳川家霊廟、旧東京音楽学校奏楽堂などの重要文化財を初め、美術館4、博物館・資料館5、東京文化会館や芸術院・学士院、正岡子規記念野球場や西郷隆盛像など数々の文化施設を有し、東京の文化センターを成している。



ちなみに「上野戦争」の弾痕の残る寛永寺の黒門は、現在、南千住の円通寺に移築されている。旧加賀藩の赤門と並ぶもう一つの黒門(旧因州池田藩江戸屋敷表門・重文)は、国立博物館に移築されている。

世評・時評

時代小説を読むと「鯉口を切る」と云う言葉がでてくる。刀の鞘（さや）に刃（やいば）をしまう口の部分を「鯉口（こいくち）」という。

しからばこの「鯉口を切る」との行為は、親指で鍔（つば）を押し上げ、「さあ、何時でも抜ける。次は斬るぞ」とばかりに刀身を鞘から少し引き出しておく動作を指す。

尖閣海域で中国軍の艦艇が海上自衛隊の護衛艦に向けて火器管制レーザー照射した行為について、中国外務省報道局長は定例記者会見で「報道で初めて知った。状況を把握してない」として事実関係の確認を避けている。更に、「（国防省など）担当部門に問い合わせてほしい」と回答しているだけ。国営中央テレビや国営報道（新華社通信）もこの問題を一切伝えず、一部夕刊紙では、日本の報道を引用した上で「日本側の一方的な情報で、事実かどうかわからない」と識者の意見を含め紹介をしている。

習近平指導部内では、日本や米国の出方を見極めていて、今後の対応を慎重に検討している模様が伺える。

中国軍艦艇の行為は「次は撃つぞ」と鯉口を切るに等しい挑発である。血に飢えた辻斬りの浪人ではあるまいに。

かつては米軍がレーダー照射を軍事行動と見なし、報復にイラク軍の施設を空爆した例もある。軍事衝突を招きかねない〝火遊び〟をする、中国の了見が分からない。事柄は尖閣に限らず、相手は中国に限らず、外交を実りあるものにするには一人でも多くの、共感をよせてくれる友人が要る。

安倍首相の指示で防衛相は事実関係を公表した。善玉はどちらで悪玉はどちらか。国際社会の観客席からしっかり見てもらういい判断であったろう。

柄袋（つかぶくろ）をかぶせ、こちらは鯉口を切るまい。領土で譲らず、不作法にキレず、挑発に乗らず、大団円まで先の長い物語を覚悟しよう。

（ヨッチャン）

雑記帳

小林 辰男

「春」は花の季節。陽当りの良い所では水仙の白や黄色の花が咲いてる。菜の花も黄色い自然色で、人工的には出来ない色、本当に自然の色は美しい。

これからは、梅、桃、サクラと色々な楽しみが待っている。他にも多くの花が、春よ早く来いと言っている。

又、先日の「成人の日」の大雪にはびっくり。テレビ、新聞などでは大雪の注意報は発令しておらず、（雪が降ることは言っていたが）朝起きたら、びっくり！ 外の景色は白一色の銀世界。

観るのはきれいだけど、後が大変である。交通機関、特に高速道路は渋滞し、一般道路もマヒし、「道」と名のつく所は全てが混乱。

雪国地方ではなおさらで、家の屋根に積もった雪をおろす作業中、足を滑らして転落して亡くなった方もいるので、雪の日に外出をする時は、上下左右、全てに気を付けないといけない。

楽屋入り

井関　義久

ある時はしがない大学の教員、またある時はプロの狂言師と、二足の草履を履いた。

一日の中で、昼と夜とを使い分けていることもあった。スーツにネクタイを決めて楽屋入りをすると、異様な雰囲気が漂った。

ふつう楽屋入りは和服姿だ。ホールなどで催される時は、床に畳表を敷く。座るのは正座が当たり前だから、能楽堂の楽屋にズボンの膝を折った格好は様にならない。昼は「先生」と呼ばれるけれど、夜は「弟子」の一人。舞台で絶句し、頭の中が真っ白になったことがある。後ろに控えた後見役がそっと科白を教えてくれても、耳に入らない。何秒かの空白が永遠に続くのではないかと思われた。

ふっと思い出した科白が、何事も無かったかのように口をついて出て来る。あの何秒かの空白は一体何だったのか。目の前が真っ暗になって、まるで眠っていたような、それは一瞬の出来事だった。見物は誰一人気付かなかったらしい。

講義の最中、ふっと睡魔に襲われることがある。誰にも覚えられずに一瞬眠ったかもしれない。

教員控室は楽屋に似ている。ぎっしり詰まっている時もあれば、誰もいない時もある。合図の音で腰を上げて教室に向かう。学生の期待に添えるような話ができるか、ふと不安が過る。

ネクタイの結び目に手を当てて、深呼吸を一つ。教室に向かう際のまじないだ。舞台に向かう時、袴の結び目に手を当て、扇の表裏を確かめる。楽屋内の孤独な儀式だ。

日本百観音（結願）

麻生　伊登子

西国三十三札所、坂東三十三札所、秩父三十四札所、水潜寺を最後に満願となる。平成七年、西国から巡礼が始まった。

きっかけはお寺さんの誘いがあり、今なら参加出来るかも知れないと思い、六十代の私は二十余名の人達と、先ずは福井県の永平寺から旅の安全を祈願。

禅寺の修行二日間も終わり、春四月南紀に向かう。サンフラワー号に乗船、一度は乗って見たかった船だ、心おどらせて早朝出航する。その日の事は今でも忘れることができない。低気圧が接近ということで、雨、益々ひどく、大揺れの船は台風並みであった。

苦しんだ十四時間の船旅は一睡も出来ず宇久港へ、青岸渡寺、那智の滝でホット一息。紀三井寺、長谷寺、雨の降り続く中の壺坂寺三室寺、これから幾度かこんな思いをするであろう巡拝だ。「長谷寺の回廊に雨吹きすさぶ、白装束の裾を濡らして」西国三十三ヵ寺は春秋をかけ巡拝を終える。

坂東は近県の為、こころはずむ旅となる。古里のお寺にも何ヵ寺か巡ることが出来なつかしい思いをし、のんびり歩いた所だった。千葉、茨城、埼玉、伊香保では、観光、温泉を楽しむ。

最後は秩父だ。行きなれた西武線、一時間四十分で秩父駅へ。近いせいもあって、ゆっくり巡ろうと言うことで、翌年の春を待って出発。

何ヵ寺かが集まっている為巡りやすく、村の人達の親切な接待、巡礼者にお茶などを振る舞ってくれる習わしとか。疲れた足をやすませ世間話に花が咲く。田園の中の春の草花フキノトウ、ヨモギが芽を出し摘みながらのなごやかさ。リュックの中のお弁当も楽しみ。土手に座りこんでのおしゃべりだった。

三年余りをかけ、季節はずれの雪に合い、ドシャ降りの雨に合い、長い坂道、八百余段の石段に汗し、新緑の美しさに満足し、ひとつ、ひとつが、思い出され、感激に涙し、最後の般若心経を唱える声にも力が入る。三十四番札所水潜寺で満願だった。後日、永平寺にお札参り、そして、おわり。健康で巡拝出来たこと、何よりありがたく忘れられない年月。倖せだった思い出である。

秩父34番　日沢山水潜寺

遠き日の思い出

池田　マス

春近くなると、いつも思い出されるのは学生時代のことです。

私の家は父、兄、妹と兄弟共に足が速く、私は陸上部に入っていました。「スタートが遅いので、近距離は駄目。中距離だね」と先生に言われ、八百メートルの練習に明け暮れていました。

トラックでの練習後、芝生の上に寝転び、青い空を見上げながら疲れを癒しました。心は試合のことで一杯でした。

関東大会に出場が決まり、一番をとることを心に誓い練習に励みましたが、残念ながら結果は二位でした。各県から選手二名ずつ、六人中での二番で、皆は褒めてくれましたが私の心は晴れませんでした。

春先になるといつも思い出され、今年もその時が来たので、思い出して書いてしまいました。暑い最中に、汗を流しながら練習した日々が忘れられず、懐かしく思い出されます。若いというのは本当にいいことですね。

昔のことはさておき、今も前進あるのみ、と介護の方のお世話になり、葵のスタッフさんや皆さんにもお世話になりながら、「ヨイショ、ヨイショ」「イッチ、ニッ、一、二」と声をかけて頂きながら明日に向かって頑張ろうと思っています。

こんな私ですが、今後も宜しくお願い致します。

自画像

ドラーバー　武藤四郎

私は新潟県両津市の出身で、両津中学校を昭和三十年に卒業、と同時に上京し、製本所に入社しましたが、三年で退職しました。

その後免許を取り、日立エレベーターに就職し、二十五年勤めて退職し、今度は東芝エレベーターに就職しました。

全国にエレベーターの取り付け工事に行き、六十五歳で定年退職しましたが、職長として六年間頑張りました。

あおい俳壇

麻生　伊登子

淡雪を散らし尾長は葉牡丹の
花目ついばむ雪の明日を
眉月の冷たく照らす狭庭辺の
雪の盛山きしきしと鳴る

河角　進

春めくや介助の女人の微笑（えみ）うれし

今　カツ子

寒空にバッケ芽ぶいてにが笑い
永点下いつまでつづく白い花
リハビリに今日も一日睦まじく

相田　美代子

林中に落ち葉踏むたび音変り
初雪や墨絵のごとき庭の木々
銀雪や雀（ひばり）飛び立ち雪けむり

葵友の会　広報コーナー

現在、葵で働かせて頂いておりますが、これからも安全運転で頑張りますので、どうぞ宜しくお願いします。

2月度行事の結果

カラオケ会・15日（金）
バンバンにて13名の参加。

麻雀大会・20日（水）
ベイブにて12名の参加。優勝は、高山靖清さん。初優勝おめでとうございます。

3月度行事の予定

青梅小旅行・13日（水）
吉野梅郷で梅を観て、酒蔵「澤乃井」直営店で食事です。

総会の開催・24日（日）
今回は、コーヒーとケーキで、午後3時から、場所は「葵」で開催します。欠席の方は委任状をお願いします。

（事務局長）

◆編集委員会よりお願いです

「あおい通信」は、皆様からの原稿を募集しています。担当飯島迄お申し出ください。